

ハーバード大学社会人類学の歴史

著者	平井 京之介
雑誌名	民博通信
巻	125
ページ	22-23
発行年	2009-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/4564

ハーバード大学 社会人類学の歴史

文・写真 平井京之介

2008年9月から2009年8月まで、わたしはハーバード大学教養学部人類学科「社会人類学専攻 (Social Anthropology Wing)」で客員研究員をしている。米国で一般的な「文化人類学 (Cultural Anthropology)」ではなく、英国式の社会人類学を使うのはなぜか。専攻長のM・ハーツフェルト教授に聞いた。

「ははは、英国の社会人類学とは関係ない。歴史的な理由だよ」

図書館で歴史的な理由を調べてみることにした。

博物館と人類学

ハーバード人類学の起源は博物館にある。ピーボディ考古学民族学博物館は1866年に設立され、動物学者兼考古学者のF・パットナムが最初の学芸員として着任した。彼は最初のピーボディ考古学民族学教授にもなるが、それまでに21年かかった。これは大学の経営陣が、博物館での高等教育に疑問をもっていたからだ



社会人類学専攻長のマイケル・ハーツフェルト教授。ヨーロッパ研究者として有名だが、最近ではタイでも調査。英国出身でケンブリッジ大卒、オックスフォード大で博士号取得。

いう。評議員のひとりとは学長に言う。「博物館の学芸員と学部の教授とのあいだにはたえず摩擦がある。(……) 収蔵品が授業に使われると、後で戻されない。その辺に置きっぱなしで、ラベルもなくなる。傷がつき、紛失し、たとえ壊れなくても価値を損なうことになる」(Hinsley 1992: 134)。

1890年に考古学民族学科(1903年から人類学科)として最初の大学院生が入学すると、展示スペースやロビーで授業をやりだした。暖房や照明などの設備も学生が利用しやすいように改良され、運営費の多くが割かれるようになった。博物館と学科の関心が離れるにつれ、スペースの取り合いが激化していった。

米国では第一次世界大戦までに博物館をベースにした物質文化研究が衰退し、フィールド調査を基本とする民族学が発展する。先住民の文化を消失前に記録することが主たる目的だった。資金は大学のほうに流れ、博物館は大学の付属施設とみられるようになる。ハーバードでも主導権が博物館から学科へと移った。

この時代はコロンビア大学のF・ボアズを中心とするアメリカ歴史学派の時代といわれる。人の移動による文化の伝播を文化変容の主要な要因ととらえ、限定された地域における文化史の実証的研究が進められた。

戦争とクラックホーン

1930年代になると英国から社会人類学が流入し、米国の民族学は衰退する。大恐慌をきっかけに多くの博物館が資金不足になる一方で、大学が同時代的な課題に取り組む人類学的調査を支援するようになった。

1936年、ハーバード大学にC・クラックホーンが着任する。当初、人類学科で居心地が悪かったらしい。考古学が中心の人類学科で唯一の

社会人類学者であった彼は、「石と骨」の人類学に興味をもてなかったし、精神分析学をナバホ族のフィールド調査に応用するという彼の提案を同僚に認めてもらえなかったからである。クラックホーンは人類学は理論科学であるべきだと考え、ボアズ流の文化相対主義に対抗して、人間文化における普遍的な要素を探求し、前世代の人類学が捨て去った文化進化の問題をもういちど考え直そうとした。

第二次大戦が始まると、通常の民族学調査が中止になる一方で、戦争に役立つ人類学的知識への社会的需要が高まった。米国政府は北米原住民の文化史研究に代えて、アフリカ、インド、オセアニア、東南アジアで独立や民主化、近代化を支援する研究に資金援助をおこなった。クラックホーンも大戦中には戦争情報局で日本の道徳観念についてのプロジェクトに参加し、民族誌のデータをもとに連合軍へ助言している。

パーソンズとふたつの人類学

戦争はそれまで相互に関係をもつことがなかった社会学と心理学との共同研究を促進し、文化とパーソナリティ学派のような学際的な研究を生みだした。1946年、ハーバード大学は、社会学、社会人類学、社会心理学、臨床心理学を統合して、社会関係学科 (Department of Social Relations) を設立する。中心になったのは、『社会的行為の構造』を発表して一躍有名になった社会学者T・パーソンズである。社会科学が世界の民主化を促進すると信じた彼は、新学科の設立によって、自らがめざす学問的再編成と科学的進歩のモデル化をめざした。戦争に協力していたことが学科設立の資金集めに大きく貢献したらしい。

社会関係学科は、最初の10年間で206人(人類学は21人)の学位取得者を輩出する。卒業生には、社会学のH・ガーフィンケル、R・ベラー、E・ボーゲル、C・ティリー、人類学のR・ダンドレード、C・ギアーツ、M・ロサルドなどがいる。コーネルの学生だがこの学科と交流のあったC・カイズによると、1950年代から1960年代にかけて、ハーバード大学にはふたつの人類学の課程があり、社会関係学科に属する学生は、パーソンズの影響力のもとに、米国人類学で唯一M・ウェーバーの影響を強く受けていたらしい (Keyes 2002)。ただし一方の人類学科は考古学が中心であり、民族学のほうはこの頃までにはほぼ消滅していたようである。

1940年代後半から1950年代前半にかけ、クラックホーンと彼のグループはニューメキシコで5つの共同体についてその価値観を調べ、同じ



地上6階、地下4階建てのワイドナー図書館。1915年開館。所蔵書籍300万冊、棚総延長92キロメートルという。

ウィリアム・ジェームズ・ホール。1963年建造。周囲から限りなく浮いている15階建てのこの建物は、ワールド・トレード・センターと同じく日系2世の山崎實が設計した。

環境に異なる価値システムがどう適応するかを比較研究している。D・グレーバーはこの研究を、人類学史において唯一、価値システムを理論的に分析したものとして高く評価する。(Graeber 2001)

1950年代に入ると、パーソンズが思ったほど社会は調和してないことが明らかになるとともに、学際的な研究の統合も思ったように進まず、学科の運営はうまくいかなくなる。D・リースマン、E・エリクソンなどの大物を教授陣に迎えるが、結局、1970年に社会学が分離独立し、1972年に社会人類学は元の人類学科に戻った。

現在、社会関係という名が残るのは図書館だけである。ただし社会人類学専攻はいまでも社

会学、心理学の2専攻とともに、人類学科の他専攻から100メートル離れたウィリアム・ジェームズ・ホールに入っている。

社会人類学とは

人類学科に戻って以降も、潜在的ながら、社会人類学の伝統は維持されたようである。D・メイバリーリス、N・ヤルマン、S・タンバイヤ、J・ワトソン、さらにハーツフェルトと、中心にはいつも英国と縁の深い社会人類学者がいた。一方で、博物館に先住民の収蔵品があれだけ豊富にありながら、北米先住民や物質文化、博物館人類学を専門とする教授はここにいない。

つまり、ハーバードの社会人類学には、「博物館には手を出しません」という意味もあるようなのである。モノの収集、保存、展示といった広義の博物館活動は、国家や集団、個人のアイデンティティの生産と消費にかかわる主要な場面のひとつになっている。英国の物質文化研究が示すように、ここからグローバル社会に切りこむことは、社会人類学の新たな展望を切りひらくことにつながるだろう。これだけの財産を十分に活用しないのは、もったいない。

なお、ハーバード大学についてはピーボディー博物館を南真木人

(1995)が、中国研究を韓敏(2004)が紹介しているの、そちらも参考にさせていただきたい。

参考文献

Hinsley, Curtis. 1992. The Museum Origins of Harvard Anthropology 1866-1915. In Elliott C. and M. Rossiter (ed.) *Science at Harvard University*. Cranbury Associated University Press.

Graeber, David. 2001. *Toward an Anthropological Theory of Value: the False Coin of Our Own Dreams*. New York: Palgrave.

Keyes, Charles F. 2002. Weber and Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 31: 233-255.

韓敏 2004 「21世紀の中国に関する人類学研究の回顧と展望：中国・アメリカ・日本のパースペクティブ」『民博通信』103号。

南真木人 1995 「ハーバード大学人類学部ピーボディー考古学・民族学博物館の展示替え」『民博通信』69号。



考古学専攻と形質人類学専攻が同居するピーボディー考古学民族学博物館。

ひらい きょうのすけ

民族文化研究部准教授
 専門は、社会人類学、博物館人類学、東南アジア研究
 論文に、「The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society Imagining Communities among Northern Thai Factory Women」(*Imagining Communities in Thailand*, Silkworm Books, 2008)、
 「知識のマテリアリティ：北タイのバイラーン製作に関する試論」(『生態資源と象徴化』弘文堂 2007年) など